

漱石と「石鼓文」の装幀

枅尾 武

はじめに

漱石が「石鼓文」を使って、「心」初版の表紙の装幀をしたことは良く知られている。漱石は「石鼓文」という名称は書き物の中では使っていないように思える。鏡子夫人の談話を松岡譲筆録の『漱石の思ひ出』（昭和三年十一月二十三日刊 改造社）の五三「自費出版」には「石鼓文」の語が見える。以後、昭和三年版の「漱石全集月報第十七号」（昭和四年七月）に松岡譲は「全集の装幀」という一文を書き、表紙の装幀について詳細に述べている。最近、松村茂

樹氏は『漱石全集』の装幀から——漱石と呉昌碩そして長尾雨山——（『漱石研究』九号 一九九七・十一月二十日）という論文を書き従来の研究を一步抜け出した好論となっている。筆者は「石鼓文」の表紙に興味を持ち数年前、漱石が使ったと思える「石鼓文」の残卷（図1）（現存四鼓の初めまで）を東北大学附属図書館の漱石文庫で見ることができた。ただ困ったことに清の阮氏重撫天一閣本「石鼓文」（阮氏と阮元は同義以下同じ）と同系統の本文らしいことは解ったが、漱石所持本と同版の「石鼓文」を発見することができないまま今日に至っている。漱石文庫にはもう一本、清の羅振玉が将来影印した『廬山陳氏甲秀堂法帖』（図3）（外題

『甲秀堂帖』明治四十五年刊)が在り、「石鼓文」が収められていて「漱石山房」の印記がある。(注1)この本は完帖で阮氏天一閣本と同じく宋代の「石鼓文」の重撫(模)本である。

羅振玉は後、民国五年(大正五年)に中国で『石鼓文考釈』(注2)を出版、天一閣本、『甲秀堂帖』、石鼓硯、旧拓本、今拓本の字の異同を対比している。(注3)筆者は漱石の石鼓文にまつわる疑問の何点かを取り出し、できうる限り解明してみたいと考えている。

漱石は大正二年七月の津田青楓宛や五葉の兄橋口貢宛の書簡に呉昌碩の作を評してアンデパンダンという言葉を使っており、ロンドン留学中シユール・レアリズムの作に心引かれたとされている。「石鼓文」により啓発されて、この表紙を作つてみたいと考えたのであろう。

書物に於ける装幀は人に例えると衣服や装飾品に当る。作家に依つてそのバランスを異にする。漱石に於ては作品のみならず、装幀をも重要な意味を持つてゐる。したがつて装幀を無視するわけにはいかない。漱石の装幀を研究する意義はここにある。

一、漱石の『心』の表紙の装幀

漱石は大正二年七月三日に清国湖北省沙市日本領事館の橋口貢に書簡を送り、「御贈の拓碑只今着(き)披見、小生あの方の道に味き故歴史的に何も分らず、只字体の面白き所へのみ興を惹き申候。御芳志難有候」と述べている。この「拓碑」は今、東北大学図書館の漱石文庫に蔵する「石鼓文」の残巻がこれであろう。大正三年八月九日、橋口貢への書簡に、「御惠贈の拓本は頗る珍らしく拝見しました。あれは古いのではないでせうが面白い字で愉快です、私は今度の小説の箱表紙見返し扉一切合切自分の考案で自分で手を下してやりました。其内の表紙にあれを応用致しました」とある拓本も同じ「石鼓文」であろう。ただ、先にも述べたように漱石は「石鼓文」の語をその遺された文章に一度も使つていないように見える。

漱石が「石鼓文」という拓本であることを認識する契機は先に述べた『甲秀堂帖』に「周石鼓文譜」と題していること、大正二年七月三日の橋口貢宛の書簡に「書苑と申す雑誌御承知にや」と述べているが、『書苑』(注3)という書道雜

誌は漱石文庫に一巻一号（明治四十四年十一月三日）より大正五年十二月五日七巻二号まで存す。その中、六巻二号（大正五年二月五日）より明拓「石鼓文」と「儀徵阮氏重撫天一閣北宋石鼓文本」が、原寸大に影印され、七巻二号には第六鼓までが影印されている。それ以後、七巻十号（大正六年八月五日）にて十鼓全部が完結している。漱石の死は大正五年十二月九日（五十歳）である。この年十一月二十一日胃潰瘍にて臥床する秋頃までは『書苑』の「石鼓文」を見たと考えられる。この天一閣重撫本と「甲秀堂帖」により「石鼓文」という名称を知ったであろう。

ここで「石鼓文」の概略を述べる必要がある。

石鼓文は春秋末期から戦国初期以降秦の時代に作られたと考えられている。鼓形をした花崗岩十個に王の狩獵の様子を詩經の体に習って刻したものとされる。初唐以来注目されるようになったが、放置されたり各地を転転する数奇な運命を経て今は北京の故宮博物院に保存されている。宋代から清の羅振玉、現代の郭沫若を経て李鐵華の『石鼓新響』（二九九四・六、三秦出版社）に至るまで解説が続けられている。その字体は籀文と小篆の中間の形をとり、特異な姿の字が見られる。中国の石刻最古のものであり一辺

四センチのやや横長の優美な字体は当時の石刻文中最も秀れている。

現在伝えられている「石鼓文」の最善本は明の安国旧蔵の十種の北宋拓本である。安国は書齋を十鼓齋と称して珍藏したが、そのうち四種は、民国元年前後に上海芸苑真賞社から影印されて知られるようになった。その内、最善本とされる先鋒本、中権本、後勁本は現在、二玄社で影印出版されている。この原本は三井文庫（三井聴水閣旧蔵）に蔵されている。中権本は『宋拓石鼓文』（西東書房、初版未確認、復刻初版昭和五十七・十一・二十）や『周宣王石鼓文』（昭和新選碑法帖大観）所収、昭和十・七・二十）等が芸苑真賞社本を底本として影印されている。一面三行、行五字、巻尾に元の倪瓚（AD一三〇一—一三七四）の「癸丑中秋觀於耕漁軒倪瓚」の識語が見えるのが特徴。後勁本は芸苑真賞社版を影印したと思える、中村不折著の『東周及石鼓文』（法帖書論集）雄山閣、昭和九・十二・二十五）等がある。

右は最善本であるが、羅振玉（一八六六—一九四〇）は『石鼓文考釈』の「石鼓文諸本存字異同表」には石十鼓齋四本は使っていない。郭沫若は一九三九年（民国二十八年）『昭和十四』芸苑真賞社本を用いて『石鼓文研究』（商務印

書館)を著し、石鼓原本の復元に使っている。

漱石は時間的には中権本を見ることができたが、実際は見ていないと考えられる。漱石が見て『心』の表紙を作った石鼓文は漱石蔵の阮元の重撫天一閣本系本と『甲秀堂帖』の二本に限定される。十鼓齋本が影印出版された清末・民国初年まで、明の楊慎「函海本」、顧從義の「石鼓硯本」、清の阮元天一閣重撫本(双鉤刻石拓した本)、王昶の『金石萃編』、馮雲鵬の『金石索』、楊守敬の『望堂金石初集』本等明・清の重撫本の多くは天一閣系のものである。北宋の『范氏天一閣北宋拓石鼓文』は残念なことに「太平天国の乱」(咸豐十年一八六〇)に焼失している。

漱石が『心』の表紙の写本にした天一閣系「石鼓文」の原本に近い阮元重撫天一閣本は張燕昌に双鉤本を作らせ、刻石させ重ねて拓本にしたものである。楊守敬の『望堂金石初集』は光緒三年(一八七七)に刊行された天一閣本の双鉤本である。石に刻する時に双鉤本を用いた。また、これに填墨した法帖もある。また漱石の表紙のように朱墨で拓したものもある。

この天一閣本の「石鼓文」は松村茂樹氏が推論されたように、漱石所持の「石鼓文」と同系のものである。同系で

あるが同一ではない(註6)。微妙なところで字体に違いが認められる。これとは別に『心』の表紙と大正六年版以後の「漱石全集」の表紙も可成りの面で字体の変化が見られる。阮元天一閣本と漱石の「石鼓文」との違いは字体のみならず拓面の形の違いが認められる。阮元本は原石の配列に忠実に拓されているのに対して、一面三行一行四字の後勁本の形に剪装されている。安国本は各鼓ともに改行して区別されているのに対して、漱石本は四鼓の初めまでであるが第二鼓と第四鼓は行替えしていない。ただ、漱石の手で「石鼓文」が紹介されることにより、中村不折(註7)に興味を持たせ、以後日本における石鼓研究を盛んにした功績は大きい。ただし、岡鹿門が明治三十年三月に跋を書き、琴石松井敬一に模刻させた「石鼓」(明治三十一年二月四日 苗村治平刊)が存在するが、あまり普及しなかったように思える。

さてここで漱石の表紙の装幀の本論に入らなければならぬ。橋口貢への書簡で表紙が作られた事情を知ることができるが、鏡子夫人の「漱石の思ひ出」に「心」を岩波書店から自費出版した事情が述べられている。その文に「心」は自分で装幀をするといふので、表紙も見かへしも

みんな自分で指図してやつたやうです。表紙は橋口貢さんから贈られました支那の古代の石鼓文とか申すものの石摺りから取つたものださうで、其後亡くなりまして全集を出す場合に、ああでもないかうでもないの評議の末に、結局全集の表紙には、夏目自身の装幀した『心』の装幀をそつくり借りるのが一番よささうだといふことになつて、前の全集でも今度の普及版でも、みんなその『心』の装幀によつてやつて居ります。(昭和三年改造社版、ルビは省略した)と述べている。この文章は『心』初版の漱石の序に符合する。その文に「装幀の事は今迄専門家にばかり依頼してゐたのだが、今度はふとした動機から自分で遣つて見る氣になつて、箱、表紙、見返し、扉及び奥付の模様及び題字、朱印、検印ともに、悉く自分で考案して自分で描いた。木版の刻は伊上凡骨氏が煩はした。」(大正三年九月)と述べている。表紙の版下は漱石が自ら「石鼓文」を臨書し、伊上凡骨氏に木版を作つてもらつたことになる。

漱石の「石鼓文」の表紙の装幀について最も詳細に書かれたものが、昭和三年版の「漱石全集月報第十七号」(昭和四年七月)に書かれた松岡讓の「全集の装幀」である。表紙作製の秘密を探るのに重要であるのでここに引用し、

私見を述べたい。漱石が亡くなつて全集を出すに當つて議論の結果「自身の装幀(『心』の装幀)があるのだから、それに則つたらといふ事になり、一決したのが、大体今日の装幀であるのである。大体と言つたのは『心』の装幀と違つてるところがあるからである。『心』の表紙のひらには、二重枠の中に『心 荀子解蔽篇 心者形之君也……』云々と、康熙字典の心の条が八行ばかりにぬき書きがあつたが、全集には無論それがなく、その代り題字題簽が先生の畏友狩野亨吉博士の手になつてゐる事である」と述べられている。ここに言う『康熙字典』は漱石文庫に蔵される都賀庭鐘校訂になる安永七年刊の和刻の大型本である。この「心」部の「荀子解蔽篇・礼大学疏・釈名」等の写真版を一行八字八行に剪裁し、二重枠を付したものである。全集刊行の際後人の手で(津田青楓か)「石鼓文」の版面に手が加えられたものらしい。

続いて「この表紙の文字模様は、通常『石鼓文』といはれて居る、周の岐陽の石鼓の拓本から取られたものである。『金石索』によると、獵の事が刻まれて居るのであるが、永く埋もれて居て、唐の初めに世に現はれたとある。(中略)拓本で普通行はれて居るのは、三百八十六字本

と、北宋旧拓の四百六十二字本とあつて、後者が善本だと見えて居るが、先生所蔵の拓本も、復刻ものには違ひないが、字数の上からいつて恐らくこの後者に拠つたものであらう。橋口五葉氏の令兄貢氏が支那の領事をして居られた頃贈られたものかと思ふ。(中略) 惜しい事に先生手沢の拓本には貼り違ひがあつて、『金石索』に載するところの本文と違ふところがまゝ、あるのであるが、と述べられている。「周の岐陽云々」とあるのは、宋の董迪(注1)が周の成王の時代と定めた旧説による。今は唐蘭(注2)の秦の獻公の十一年(前三七四) 説が有力である。漱石の頃は当然、周の成王代の作と考えられていた。

拓本の字数は『金石索』に示すものであるが、三六六字は元代の潘迪の『石鼓文音訓』(注3)により、四六二字は天一閣本を指す。漱石所蔵本は天一閣本系であるので松岡讓の推理は當つている。

漱石手沢の拓本の貼り違いについては恐らく、頁の配列の誤りであろう。今、漱石所蔵本の墨付本文を九丁(十八面、図1参照)として、これを天一閣本の配列に直すと一(1・2)、二(3・4)、三(5・6)、七(13・14)、八(15・16)、九(17・18)、四(7・8)、五(9・10)、六

(11・12)の順になる。漱石は一、二、三、四丁を使って表紙を作つており、『心』の装幀当時すでに「石鼓文」の配列は誤つてゐる。

更に続けて「『心』の表紙の刀と刷とは伊上凡骨氏の手になつて甚だ高雅温潤、色合も頗る趣があつたが、それが菊版の全集となり、今又普及版となるに及んで、最初の和紙が布に変はつて第一に趣を失ひ、今度は大量製産で手刷が出来るので、先生当初の意匠だつたデリケートな色合はかなり害はれて、謂はば幾分俗悪になつた。」と述べる。ここで言われるように全集になつて俗悪になつたことは認められるが、『心』初版本と全集の表紙を比較(図2)してみると紙が布になり量産されたためだけでなく、明らかに字そのものに手が加えられているのが解る。

二、漱石の書いた石鼓文

漱石の書いた石鼓文はかなり変則的な字体であり松村茂樹氏は呉昌碩の影響を推理されている。呉昌碩の臨石鼓文は多作である。漱石の臨石鼓文と共通点を求めるならば津田青楓(大正二年七月二日)や橋口貢(大正二年七月三日)に

宛てた書簡に東京で開かれた健筆会に支那の呉昌碩の作品を評して「文人画のアンデパンダンだから面白い」と書いているところにある。呉昌碩は石鼓文を臨書するのに阮元の天一閣本を臨模しておいて、これを手本にしたといわれている。漱石の臨石鼓文等を対照できるようにした一覽表を作ってみたが、石鼓文の拓や羅振玉の臨本は定本という性格上正整な型をもっているのに対して呉・漱二人の作は草書風の破体である。これについては松村氏が詳しく論じておられる。アンデパンダンとはフランスに於てアカデミーに対抗して作られた美術団体であり、その展覧会を指すが、反アカデミー風は呉昌碩・漱石の共通項であろう。十鼓齋石鼓文や天一閣本あるいは羅振玉本いずれもアカデミーであり、これを破っているのが破格体の石鼓文を書いた呉昌碩や漱石ということになる。

呉昌碩の石鼓文は今知られている作では全臨四種と部分臨十四点以上である。その中、漱石が健筆会で見たくも知れない作は呉昌碩の七二歳（一九一四年＝大正三年＝民國三年）以前の作となる。現存する作品から考えると六六歳（（図19））以前のものとなる。一覽表の全臨は六五歳の作である。全臨の作はやや改つていて、軸・幅のものの方が自由闊達であ

る。展覧会にもし出品されていたとすると軸・幅の小品であらう。『書品』一〇一号（昭和三十四・七）の呉昌碩臨石鼓文二種を掲載した特集には伏見冲敬氏の「呉昌碩臨石鼓文」という論があり、金山鑄齋氏蔵の六六歳作「臨石鼓文」（松村氏が論文に引用している）と五九歳全臨の平尾孤往蔵品その他が収められている。もし漱石が見て啓発されたものは金山鑄齋蔵本の如きものであらう。漱石が呉昌碩の臨石鼓文を見ていなくとも、画賛は見ているはずであるし、面白く創作意欲をかきたてられていたはずである。

さて松岡氏のいう『心』の「高雅温潤」の評を実作に当たってじっくり眺めて初版本と比較するとその評は正鵠を得ているが、呉昌碩の体に比して鈍重で躍動感に欠けると思えるが如何であらうか。鈍重は高雅にも通じるが、迫力を欠くことは事実である。ただ「石鼓文」そのものが刻石された時には革新的なものであったのであるから、過去に漱石が見ていた篆書に比してアンデパンダンであったと考えられる。漱石が篆書に興味を持っていたことは『吾輩ハ猫デアル』以下装幀に篆書を多用していることや蔵印を見ても明かである。

三、『漱石の思ひ出』に於ける「石鼓文」

松岡譲は前記「全集の装幀」に於て「漱石未亡人述、小生編録の『漱石の思ひ出』の装幀も一見全集に似て居て、其実よく見ると全く違つて居るのである。そこに苦心といへば一種の苦心があるので、表紙は同じ石鼓文の違つたところから文字を拾ひ、見かへしも先生の趣味にならつて、前記『花ふくさ』^(注13)の一部を借りて創案を立て、扉に橋口五葉氏案の先生の原稿紙の外枠を拝借したりなどして、先生の趣味を取り入れるにとめたのである。まゝ全集と『思ひ出』とが同装幀などと早合点する人があるやうだから、ここに書き加へておく次第である。」と述べている。

『思ひ出』の表紙は松岡譲あるいは津田青楓が作ったらしいが、『心』とは違い、漱石所蔵の石鼓文を写真撮影し、これを切り張りして作ったらしい（あるいは臨書したかも知れない）。字体や印象が違うのはその為である。『思ひ出』^(注14)は最初、改造社から昭和三年十一月二十三日石鼓文による表紙と外箱を作り、翌四年十月十五日岩波書店から同じ石鼓文の表紙で初版を出している。外箱は『心』の意匠を受

けている。これが二刷当りから『漱石全集』と同じ形の石鼓文の表紙に変じている。実は二刷は見えていない、三刷（昭和四年十一月二十日）では変じていたのでわずか一箇月の間に三刷まで出たことになる。改造版には多くの写真を載せていたが岩波版ではほとんど除き、新しく「漱石年譜」を加えている。改造版の跋に松岡譲は「本書の体裁を大体漱石全集普及版に則つたことは、多数読者の御希望と出版社の切望とをいれた結果であつて、他意あるものではない……」と断つている。これが『心』の石鼓文と同じものだといふ誤解を生んだものであろう。ここに用いられた「石鼓文」は第四鼓と第二鼓を中心に第三鼓は四字ばかり使い、計八五字が使われている。天一閣本の右側に算用数字を付したものが漱石の『心』の表紙の配字順で、左側に白丸で囲んだものが『思ひ出』の配字順である。一部両書に共通に使われているが、当時は少くとも第四鼓までは「石鼓文」が所蔵されていたことが解る。『心』の字の配列は何とか文（詩）意が取れるが、『思ひ出』の方は全くばらばらに字の配列がなされている。

四、結 び

漱石の石鼓文による装幀について述べて来たのであるが、この度、東北大学附属図書館の好意により、漱石文庫蔵の「石鼓文」の撮影と掲載の許可が得られたことで、積年の希望がやっと達成できた。ただ残念なことに四、五、六(図1)を、不注意によるものか、撮影することができず、過去に入手したプリントで代用することになり、やや不均整の誇りをまぬがれないことになった。幸い原文の面影を伝えることは出来たと自負する。

『心』の初版本については日本近代文学館の特別な計らいにより、三本を拝見し、その忠実な複製本と対比することが出来た。『漱石全集』の大正六年初版は手元にある本を見ると何分古いので、印面の「石鼓文」の中に入れられた薄緑がすっかり退色しているが、その面影はうかがえる。全集については矢口進也著『漱石全集物語』(青英舎一九八五年九月二十五日刊)に詳しい。

全集の初版の石鼓文は『心』の石鼓文の伊上凡骨氏の木版を使ったとされるが、全集ではすべての字に手が加えら

れており、図9—8の「射と猫」(『心』)の間に全集では「其」字が挿入されている。もし板木を使っていたとしたら、うめ木が施され、板面が訂正されたことになる。推量になるが、『心』の表紙を写真撮影し、切り張りし、修正を加えたものではないかと考えられる。『心』の縮刷版の複製本が正確に影印されたことを前提とすると、全集初版に先立ち、各字に修正が加えられている。全集は数次の出版を重ねるに従い、読解不明になっているものもある。漱石は「石鼓文」を書写するに当り、原石が剝落したものをあたかも字の一部かと誤っているものもあるが、これは致し方がないであろう。

『漱石の思ひ出』の改造社版を岩波書店初刷とその後の刷りの違い等も知ることが出来た。この『思ひ出』の装幀の「石鼓文」は原文の切り張りなのか、それとも誰かが書写したのか疑問がある。漱石の「石鼓文」に比して格調が低い。個々の事柄についてはすでに述べた通りである。研究の息抜きのもりで書いた小稿が、いつの間にか多くの時間を費してしまったが、教えられること少なからずであった。ひと先ず筆を擱く。

四

東北大学附属図書館漱石文庫蔵

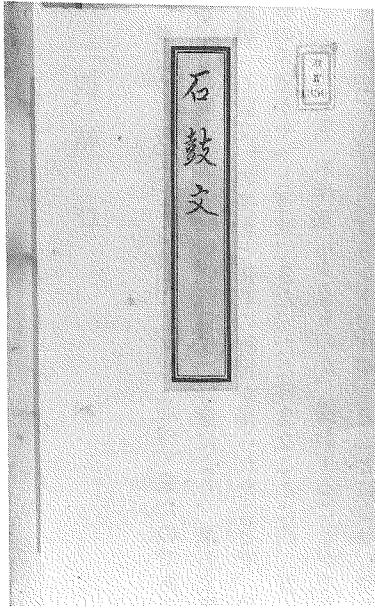
石鼓文

掲載許可書 No. 8812

本文の配列は漱石文庫の配列順に従う。

漢数字及び算用数字は阮元の配列(図

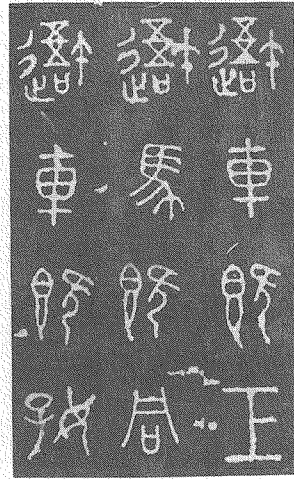
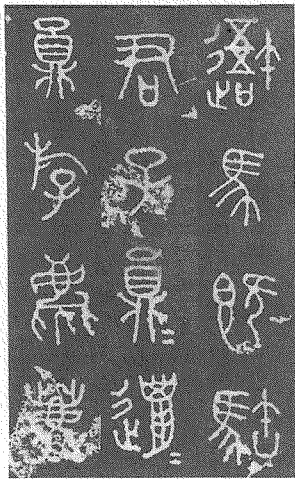
を参照)順に従う。



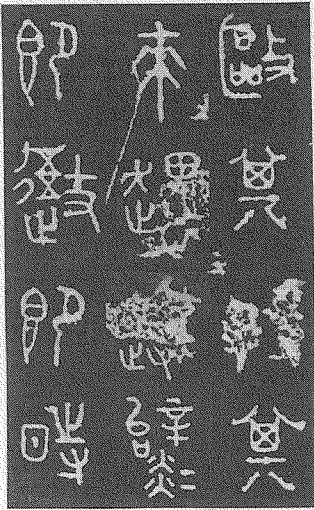
2

7

(一)



4

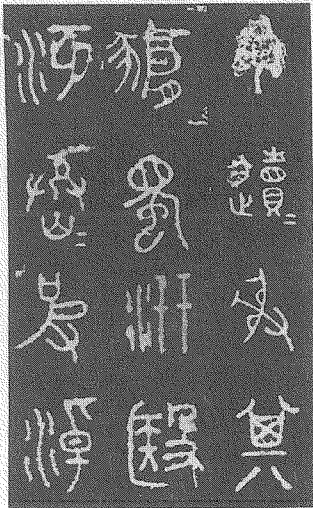


3

(二)

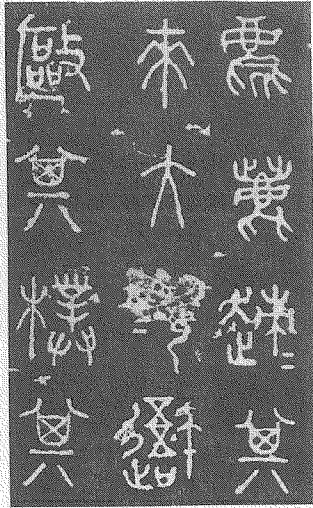


6



5

(三)



14



13

(七)

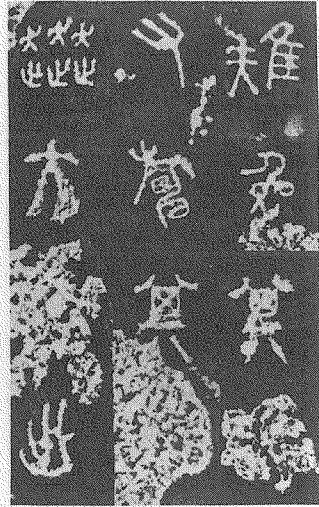


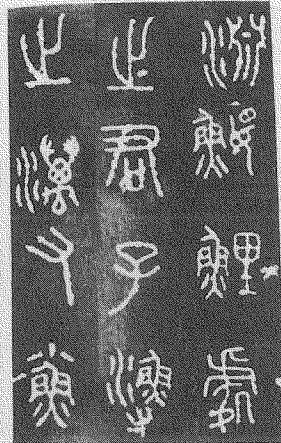
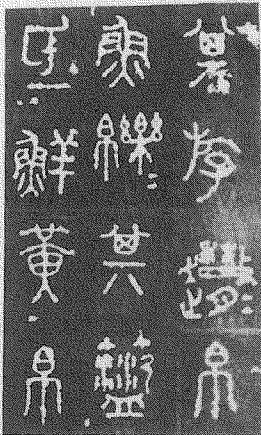
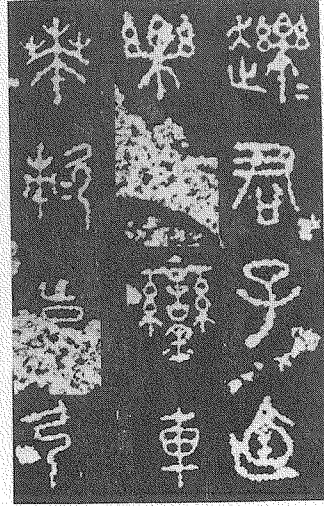
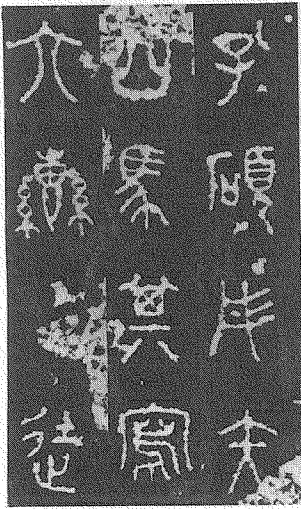
16



15

(八)





10

9

(五)

鯢	爽	濇
雀	雀	濇
鯉	可	燻
可	雀	其

矣	习	其
厖	鯢	鯢
纒	其	习
止	却	鯢

12

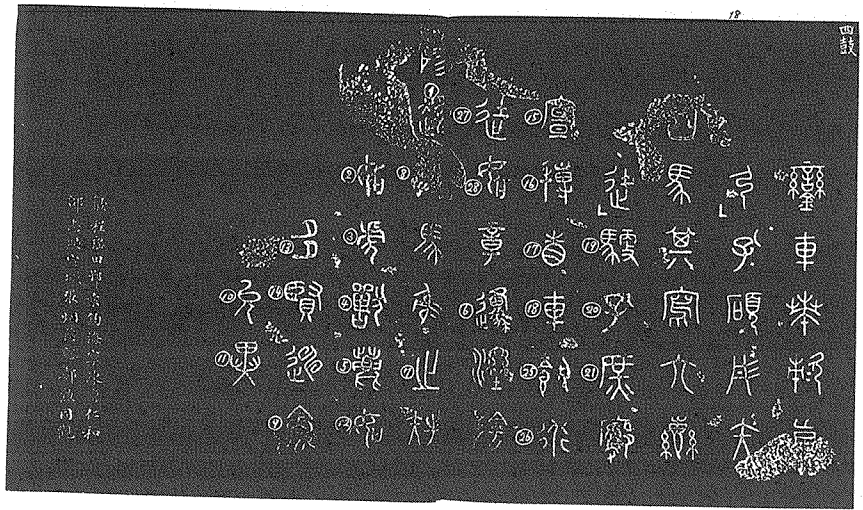
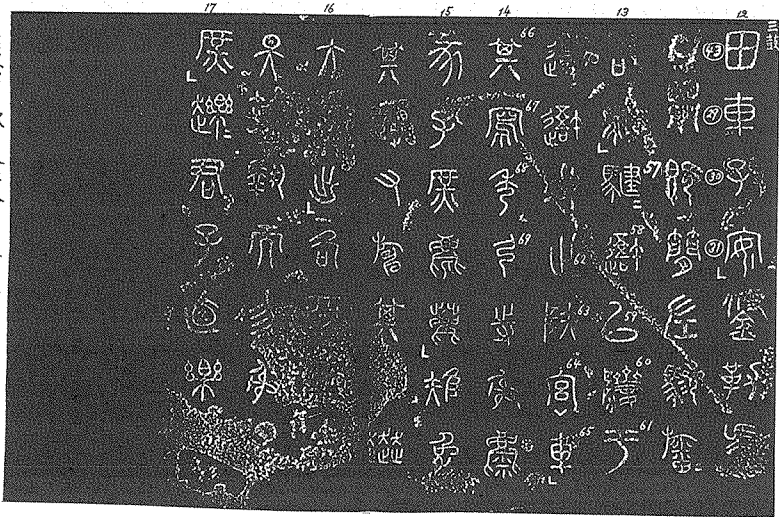
11

(六)

新	鼎	金
曆	師	新
曆	師	新
曆	師	新

田	楊	乙
東	支	黃
東	棟	止
東	棟	雀

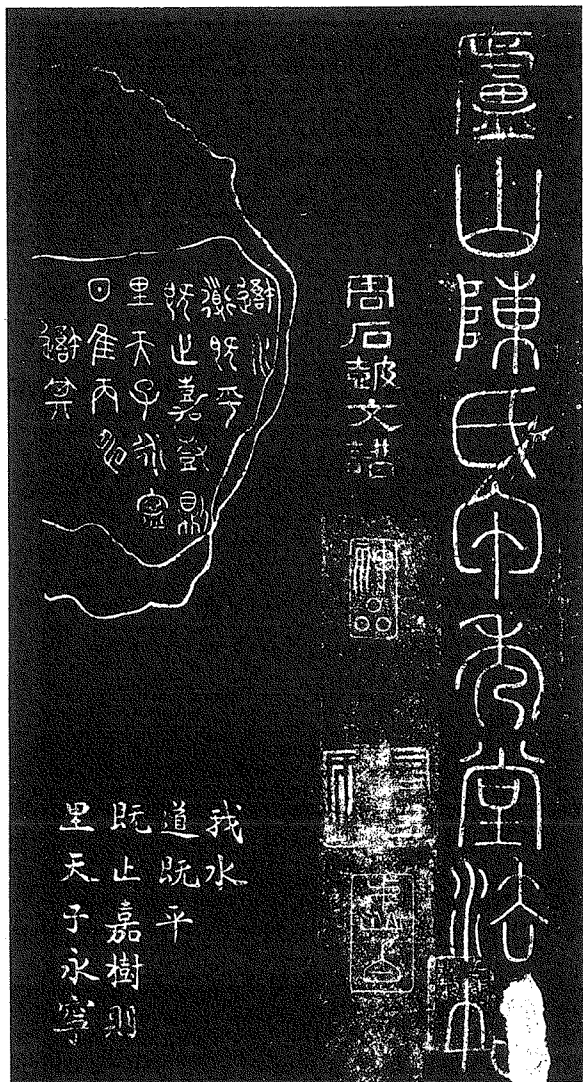
頭の算用数字は漱石文庫本の頁数を表わす、一頁三行一行四文字計
 十二字一丁二十四字、本文中の白抜き数字は「心」の表紙の
 字の配字順、○白抜きの数字は「漱石の用」以上の表紙の配
 字順

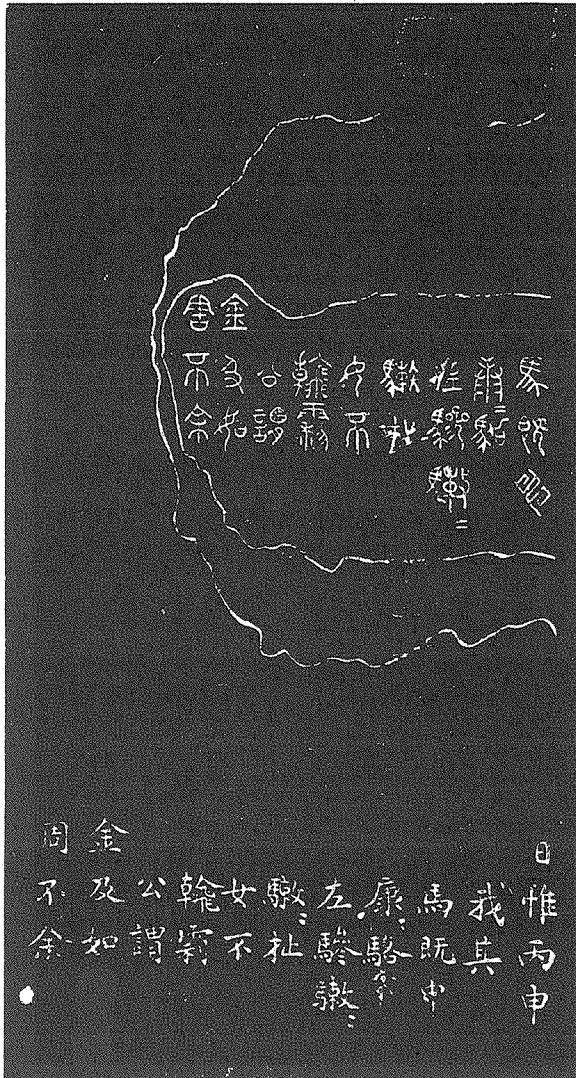


漱石文庫本の頁数を表わす、一頁三行一行四文字計
 十二字一丁二十四字、本文中の白抜き数字は「心」の表紙の
 字の配字順、○白抜きの数字は「漱石の用」以上の表紙の配
 字順

現存漱石文庫本はLの
 部分まで本文を有す

甲秀堂帖





善金
 不念
 公謂
 翰不
 左不
 康既
 馬中
 我其
 日惟
 丙申

周金
 不及
 公謂
 翰不
 女不
 駁不
 左駁
 康駁
 馬駁
 我其
 日惟
 丙申

羅振玉

石鼓文考釈

石鼓文諸本存字異同表

上虞 羅 振 玉 校

行	字	天一本	甲秀本	顧研本	舊拓本	今拓本	考異
一	四	王	同上	同上	工	同上	今字中間小橫畫皆首之
四	一	彙	同上	同上	彙	同上	顧本以巽誤下筆三頁字亦誤
四	二	鑑	鑑	鑑	同上	同上	天一本誤以置 國學優刻本改
四	五	齋	齋	齋	同上	同上	甲秀本誤
四	六	齋	齋	同上	同上	同上	甲秀本誤
六	一	𠄎	𠄎	𠄎	同上	同上	甲秀及顧本均誤
六	二	𠄎	𠄎	𠄎	同上	同上	甲秀及顧本均誤
六	六	𠄎	𠄎	𠄎	同上	同上	此字明私本特不知今私之明
六	三	𠄎	𠄎	𠄎	同上	同上	此字今私本尤明顯其筆節助
六	六	𠄎	𠄎	𠄎	同上	同上	其迹似日崩
六	六	𠄎	𠄎	𠄎	同上	同上	甲秀及顧本均有重文是也唯
六	六	𠄎	𠄎	𠄎	同上	同上	甲秀字似稍異
八	一	𠄎	𠄎	𠄎	同上	同上	驗之點未確

金石索

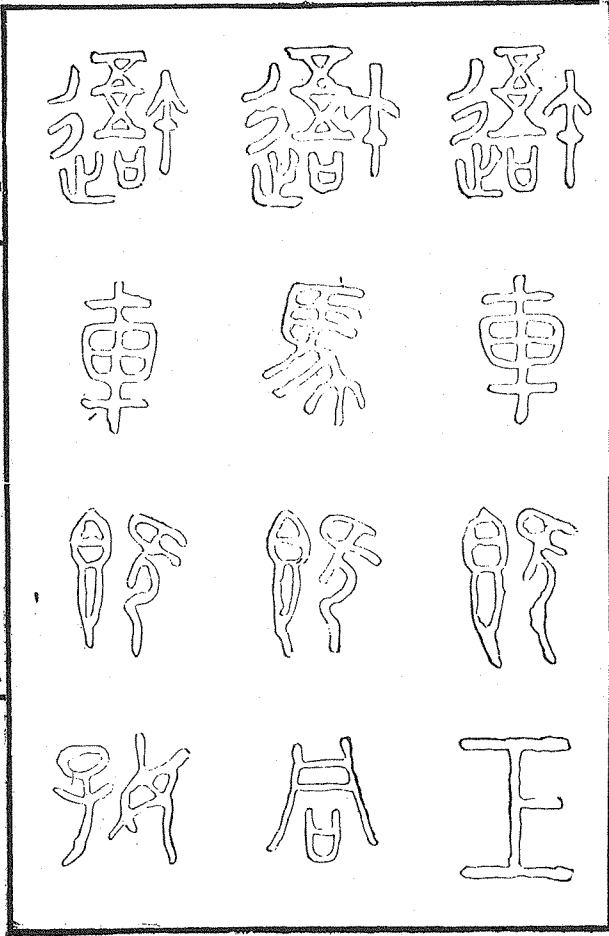
周岐陽石鼓一

在京師國子監大成門左右共十鼓



周岐陽石鼓

家古金威

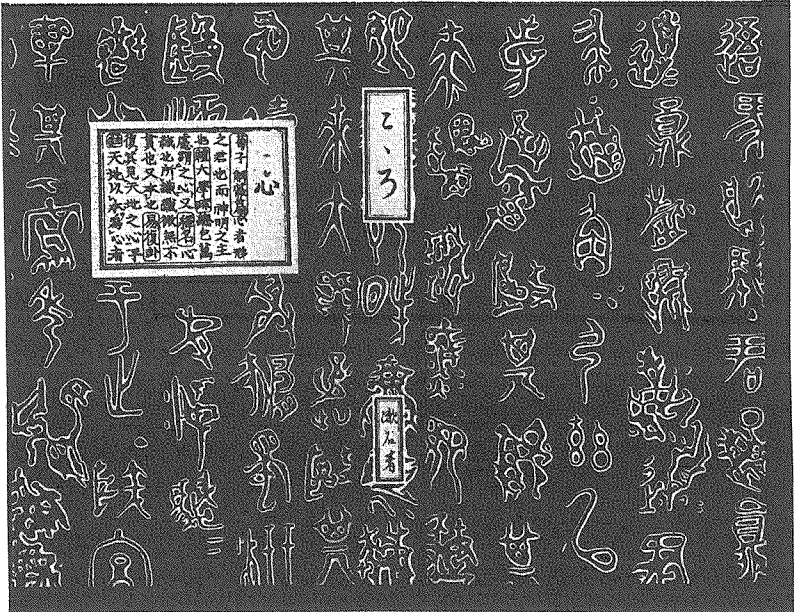


六堂金石初集

四〇 心 初版本の複製表(日本近代文学館 尾張書店原刊) 大正三十九年



四〇 心 縮刷本の複製表(尾張書店) 大正六、五十八



圖一之六 大正六年 漱石全集



昭和三年 漱石全集 普及版



清凌紹雲著奉教撰 都買庭鐘訂 平安風月莊左衛門等板 安永七年刊 漱石文庫本に淡虛碧堂圖書印記あり

康熙字典

卯集上

心部

心

唐韻息林切集韻韻會正韻思休切說文人心土藏在身之中象形博士說以為火藏徐曰心為大火然則心屬火也玉篇廣韻杜訓火藏又荀子解蔽篇心者形之君也而神明之主也禮大學疏總包萬慮謂之心又釋名心織也所識織微無不貫也又本也易復卦復其見天地之心乎註天地以本為心者也正義曰言天地寂然不動是以本為心者也禮禮器如松柏之有心也註得氣之本也孔疏得氣之本故巡四時柯葉無凋改也心謂本也又中也心在身之中詩序情動于中正義曰中謂中心凡言中央曰心禮少儀牛羊之肺離而不提心註不提心謂不絕中央也古歌日出當心謂日中也邵

康熙字典

卯集上

心部

一

木權中 木關天世院 碩昌吳 怡恬堂秀甲 心石漱 木校王振躍

遊 <small>(筆勢) 音遊</small>	遊	遊	遊	遊	遊
馬	馬	馬	馬	馬	馬
既 <small>ト</small>	既	既	既	既	既
駢 <small>ト</small>	駢	駢	駢	駢	駢
君	君	君	君	君	君
子	子	子	子	子	子
員 <small>(買) 職 買は職し 員ニ 讀む (ニは々と同義)</small>	員	員	員	員	員

員のニは踊字。以下同じ。

吳昌碩六十五歲(一九〇九) 光緒三十四(明治四十二)庚申歲臨清院九重 樞范氏天一閣石鼓文 吳昌碩石鼓文堂選全 海音畫出版社刊五九五(一)のり以下同

四心に於て原文の一部が欠落或は位を異にするものありしたが、つて読解に無理が生ずることがある。

遊 <small>カク</small>	遊	遊	遊	遊	遊
員 <small>カク</small>	員	員	員	員	員
游 <small>カク</small>	游	游	游	游	游
鹿 <small>カク</small>	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿
速 <small>カク</small>	速	速	速	速	速
君	君	君	君	君	君

釋文 羅振玉校本 漱石心 甲秀堂怡本 吳昌碩 阮氏與天一閣本 中權本



求。

角
角字以角字飾之

兹 (兹)

以

釋文 羅振玉叔本 漱石 心 甲秀堂怡本 吳昌碩 阮氏重撫天閣本 中 權 本



釋 大 羅 振 玉 枝 本 漱 石 心 甲 秀 堂 帖 本 吳 昌 碩 阮 氏 重 撫 大 關 木 中 權 本



釋文 羅振玉校本 漱石 心 甲秀堂帖本 吳昌碩 阮氏重撫天一閣本 中 權 木

即				
避				
即				
時				
鹿				
鹿				
越				
越				
越				
越				

釋文 羅振玉校本 漱石 心 甲秀堂帖本 吳昌碩 阮頤重撫天一閣本 中權 本

其	其	其	其	其	其
來 <small>ルヤ</small>	來	來	來	來	來
大 <small>ダイニ</small>	大	大	大	大	大
(次) <small>次ナリ</small>	一	一	一	一	一
遊 <small>ユ</small>	遊	遊	遊	遊	遊
毆 <small>クイ</small>	毆	毆	毆	毆	毆
其	其	其	其	其	其

釋文 羅振玉 校本 漱石 心 甲秀堂 怡本 吳昌碩 阮禮撰 天開本 冲 權本

來 <small>来</small>	來	來	來	來	來	來	來
遺 <small>遺</small>	遺	遺	遺	遺	遺	遺	遺
射 <small>射</small>	射	射	射	射	射	射	射
(其)	其	其	其	其	其	其	其
獠 <small>獠</small>	獠	獠	獠	獠	獠	獠	獠
蜀 <small>蜀</small>	蜀	蜀	蜀	蜀	蜀	蜀	蜀
汗 <small>汗</small>	汗	汗	汗	汗	汗	汗	汗

荀子 解蔽 篇 心者形

*全集では石鼓原文通り射と獠の間には字を挿入されてゐる。

段 段トク
 河 河トク
 承山 承山トク
 水 水トク
 動 動トク
 度 度トク
 卓 卓トク
 驥 驥トク

段
 河
 承山
 水
 動
 度
 卓
 驥


段 之君也而神明之上
 河 也禮人與子而總包萬
 承山 虛謂之心又釋名心
 水 織也所識織微無不
 動
 度
 卓
 驥

段
 河
 承山
 水
 動
 度
 卓
 驥

段
 河
 承山
 水
 動
 度
 卓
 驥

段
 河
 承山
 水
 動
 度
 卓
 驥

段
 河
 承山
 水
 動
 度
 卓
 驥

<p>第三韻 遊</p>						
<p>(以)</p>						
<p>(躋)</p>						
<p>于</p>						
<p>之</p>						
<p>陟</p>						
<p>宮</p>						

賁也又本也易復卦
復其見天地之心乎
謂天地以本為心者

*心。本文には以
字を欠き遊の後の
字がはかりずい。



*石鼓原本では前頁の藤字の
後に続く

臨石鼓字屏四幅之三 四 六十六歲作

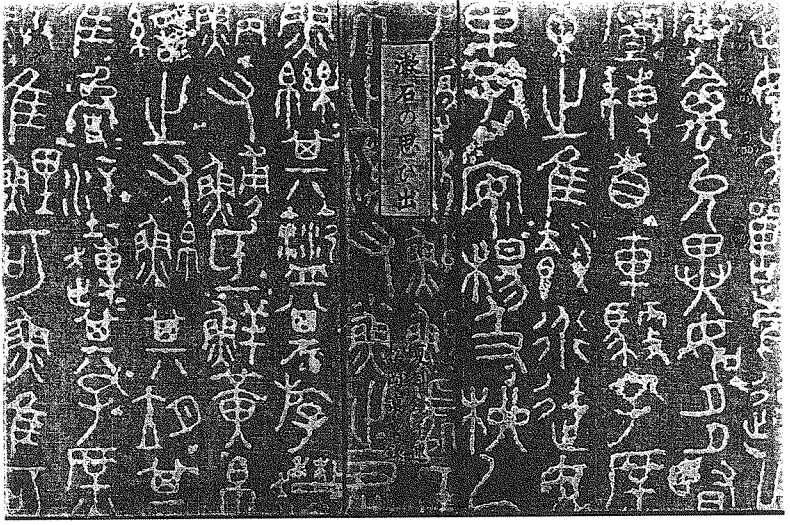
吳昌碩作品集 上海美術出版社 一九八四·四

宋金勳既而左轉羅羅右轉羅羅皆以羅字爲正其寫亦皆制變也此應然惟羅象其又轉其升夫也各並吳吳而制也羅羅羅羅字適亦又轉石鼓文字月水勢其其轉羅幸正之。己酉秋。吳俊卿。

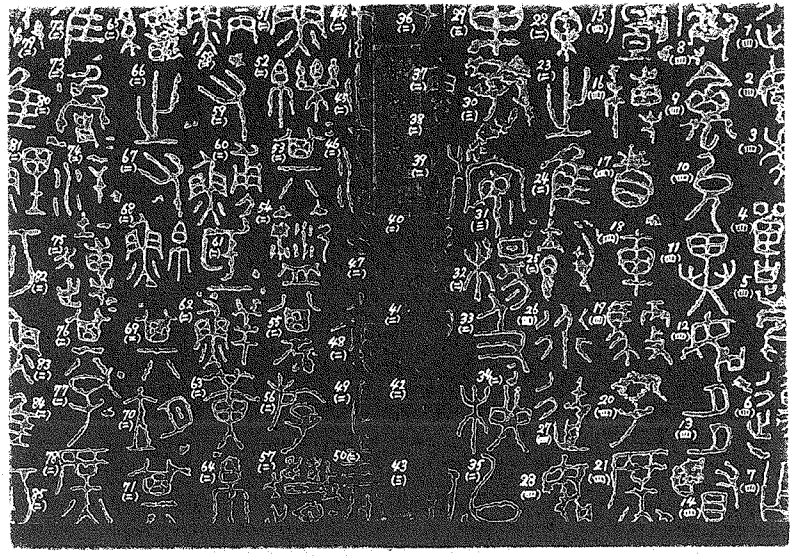
庚 燧 兔 其 斗 智 其 燧
 大 出 奇 亞 吳 執 而 多
 多 庚 樂 君 子 直 樂 斗
 留 石 鼓 今 字

月由石鼓在名居錄年
己酉秋 吳俊卿

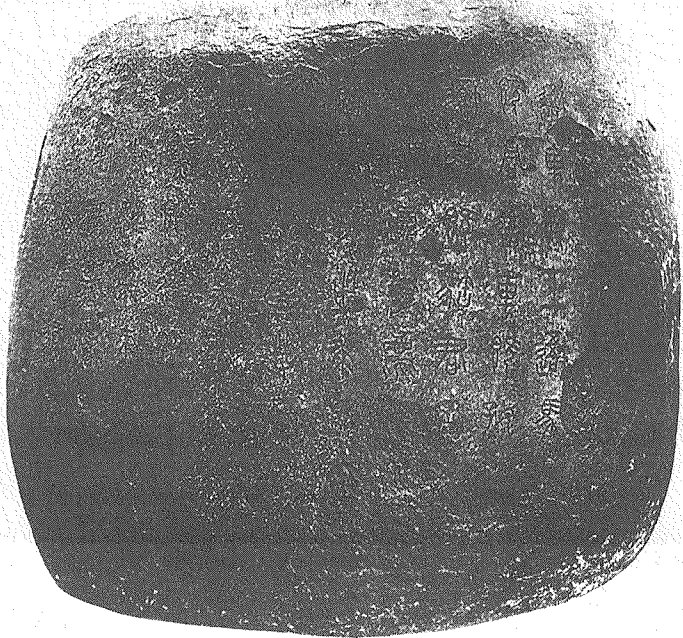
図11 改造社版『漱石の思ひ出』 昭和三十三年



岩波書店初刷『漱石の思ひ出』 昭和四十五年(図を参照)



獲陽中



(図注)

図1 東北大学附属図書館「漱石文庫」蔵。目録番号一三六五
一帖。台紙28.0×16.6糎。墨付21.6×13.0糎。十八面。「阮氏重撫天
一閣北宋石鼓文本」(図2参照)系統本文の影印本。一行四
字、一面三行に剪装。計十八面。十八面の配列順序は本来阮
元本と同じであったはずであるが、漱石が『心』を装幀した
時は現配列であったことは疑いない。その配列は阮元本に対
して(一)1・2。(二)3・4。(三)5・6。(七)13・14。(八)15・16。
(九)17・18。(四)7・8。(五)9・10。(六)11・12となっている。

図2 『儀徴阮氏重撫天一閣北宋石鼓文本』と題する拓本は明
の范欽(一五〇六一一五八五)の天一閣に蔵されていた北宋
拓の「石鼓文」通称「范氏天一閣旧藏石鼓文」を清の阮元が
双鉤(図6注参照)刻石して再び拓した模刻本である。范
欽、阮元本はいずれも原石に忠実に拓したものであるが、図
1の「石鼓文」は剪装仕立にした法帖である。

范氏本は太平天国の乱(一八五〇年)に焼失した。阮元本
は杭州(嘉慶二年一七九七)及び揚州(嘉慶十一年一八
〇六)に模刻した拓が伝わり、清末まではこの范氏天一閣本
系の本が流布していた。羅振玉(一八六六一一九四〇)も
「甲秀堂帖」本や明拓原石本の外、阮元本を底本に研究して
いる。現在は清末民国初に影印され、今は三井文庫蔵の十鼓

齋本(いずれも剪装本)が北宋拓善本として評価され、阮元
本の影は薄いが、原拓の姿を伝えるものとして価値がある。
漱石は『心』装貼以後に『書苑』誌上でこれを見ていたと考
えられる。

図3 『甲秀堂帖』壬子(明治四十五年)羅振玉跋記、同三月
十一日、内藤虎(湖南)跋記、大阪博文堂刊玻璃版(コロッタ
イブ)影印本、宋拓本の模刻本と考えられる。後に羅振玉は
『石鼓文考釈』に再び影印し諸本と対校しているが、宋の原
拓系とは思えない字体が見える。「漱石山房」の印記あり。
注1参照。

図4 「石鼓文諸本存字異同表」十鼓中諸本各鼓の異同あるも
のを対照している。「顧研本」は上海の顧汝蘇氏が石鼓文を
太鼓状の端溪硯に模刻したもの。程瑤田の「石鼓硯記」(注
2参照)に見える。「旧拓本」は明代に原石を拓したもので
はないかと考えられる。「今拓本」は清代に原石を拓したも
の。

図5 『金石索』所収石鼓文。清の馮雲鵬撰になる。十二巻か
らなり殷から元に至る金石文を金索と石索に分け、石鼓文は
石索に属す。天一閣本を双鉤彫板し模刻し考証を加えたも
の。清・道光元年(一八二一)開板、同四年頃刊(序跋によ
る)。

図6 『望堂金石初集』。楊守敬（一八三九—一九一五）は明治

十三年から十七年まで日本に滞在し、当時の日本の金石学や書道に大きな影響を与えた。この書（光緒三年＝明治十刊）

も日本に将来されていたと考えられ、漱石もあるいは見る機会があったかも知れない。楊守敬は書家としても優れており、日下部鳴鶴、内藤湖南等文人・学者や政界の人物との交流があった。この初集は双鉤という手法で天一閣本を模刻している。双鉤の手法による法書類の模刻は文字の点画の外辺に印をつけ細線を引いて写す。かご字ともいい、これに墨を入れて原本を復元することを双鉤鎮墨という。阮元は石鼓文を模刻する時、双鉤の手法を採り、これも刻石し、拓本を作った。なお拓本は墨によるのが一般であるが、朱墨により拓したのものもある。楊守敬が将来したものにそうした拓本があったかどうか解らぬが、朱字に揮毫した作もある（近代日本書道の祖 楊守敬とその交友展図録〈湖北省博物館蔵品を中心として〉、平成二年九月参照）。

図7 『心』初版本の複製（原本で確認済）の表紙は漱石が所蔵の石鼓文を自ら書写し伊上凡骨が板刻したものでモノクロ写真では印象がつかみにくい。『心』初版本と同縮刷版・及び大正六年版『漱石全集』・昭和三年版『漱石全集』とを比較するとどれも字様が違って手が加えられている。図9

参照。

図8 『康熙字典』の辞典は字典が正しい。

図9 漱石『心』の表紙の配列を中心に安国の十鼓斎の「中樞本」、阮元天一閣本、吳昌碩六十五歳「臨石鼓文」、甲秀堂帖本、『心』、羅振玉校本及び釈文の順に配列し、『心』の石鼓文の位置づけをした。

図10 吳昌碩六十六歳の作。全臨のものは改った感じであるが、部分臨は自在に書いている。松村氏論文所収の作が最も面白い。

図11 改造版・岩波版の対比。表紙に通し番号を付し「1（四）」の（四）は第四鼓であることを示す。現存漱石文庫本は四鼓の途中まで残っているが、『漱石の思ひ出』の表紙が作られた時には少くとも四鼓の終りまで存在したことになる。あるいはもとは十鼓共揃っていたのかも知れない。図2参照。

図12 「石鼓文」原石写真。馬衡撰『石鼓為秦刻石攷』（中華民国二十年＝一九三一年刊）。

〔注〕

注1 「漱石山房」の印記 松岡讓「印譜を読む」（漱石全集月報第十一号 昭和十一年九月第十四卷）に「巻頭の二寸五

分角もある大きな石印（中略）この大きな石印の印文は誰にも読める『漱石山房』。刻者は天地庵主人。初めの頃には先生自慢のものらしく、蔵書に堂々と捺すのが嬉しかったのであらう、（中略）当時よくこれを捺すのが嬉しかったと見える。明治四十年頃の事で……と見える。漱石は四十五年、『甲秀堂帖』を買って『漱石山房印』を押したと考えられる。この段階で『甲秀堂帖』所収の「石鼓文」（周石鼓文譜）を知っていた可能性が認められる。橋口貢から大正二三年頃もらった『心』装幀に使った「石鼓文」はその後入手したことになる。ただし、『甲秀堂帖』所収の「石鼓文」は阮元本やこの漱石の石鼓文とは拓の配列が異なるのもう一つ創作意欲を欠くものであったのかも知れない。

注2 『石鼓文考釈』 民国五年（大正五）上虞羅氏影印本。

後、藝文印書館 民国六三年（一九七四）影印本。丙辰（民国五年）七月 羅振玉序、石鼓文釈（釈文・注）、自筆復原文（図9参照）、石鼓文諸本存字異同表（図4参照）、盧山陳氏甲秀堂帖（影印）、石鼓硯（拓影）、乾隆五七年四月程璣田の石鼓硯記等所収。

注3 『書苑』 明治四十四年十一月三日第一号が法書会により出版された書道雑誌、古今の名品の影印等が貴重であり、当時の書道界の様子を知ることができる。賛助員として犬養

毅、内藤虎次郎、宇野哲人、佐佐木信綱等の名が見える。

注4 石鼓文の成立時期は周代より西魏北周説まで多岐に亘る。かつては周宣王の時とする説が有力で、漱石の頃もそうであったが、現在は春秋末から戦国初期以降の秦刻とする説が有力である。

注5 双鉤本 図6注参照。

注6 漱石旧蔵の石鼓文一帖は天一閣系の重撫（模）本（影印本）であることは各字欠落少くなめらかで、阮元本と比較すればほとんど同一に見えるが、一字一字を比較してみると微妙に異同が見える。また漱石旧蔵本は剪装本であるが、阮元本を剪装しこれを比較すると欠落部分において違っているところがある。今は省略する。

注7 中村不折 画家・書家として名があるが、金石文の蒐集家としても有名で、後に書道博物館を作り収蔵されている。漱石の「猫」の挿絵等を描き知られる。石鼓文に興味を持つようになったのは漱石の影響であろう。大正五年九月には明拓の「石鼓文」を購入、昭和十六年四月には宋拓の「石鼓文」を購入している。『法帖書論集』（雄山閣）に『東周及石鼓文』、『東周文字并石鼓 隸草史附澄清堂帖考』（昭和九年十二月二十五日）及び『石鼓之詳説上下』（昭和十一年十月二十五日）を著している。

注8 この『石鼓』がどの程度普及したか解らぬが、国立国会図書館に蔵される。模刻本としては日本では最初期に属するが、創作意欲を生む程の出来ではない。

注9 『広川書跋』卷二所収「石鼓文弁」にその説が見える。

『津逮秘書』叢初集成新篇48)

注10 「石鼓年代考」(故宮博物院院刊第一期 一九五八年)

注11 清・王昶『金石萃編』卷一10b「周宣王石鼓文」に見える。

(嘉慶十年一八〇五)序跋本所収。

注12 漱石は『猫』以下の自著に篆書(自筆ではないが)を用い、篆書による印に興味を持ち、藏書にも『篆刻鍼度』『秦漢瓦当図』等が見えるので篆書に興味を持っていたことは事実である。大正二年七月三日の橋口貢宛の書簡に「御贈の拓碑只今着披見、小生あの方の道に味き故歴史的に何も分らず」と書いている。謙遜もあろうが、漱石は篆書の骨法を得ていないため草書風の臨石鼓文となつたとも考えられる。決して秀れた臨書とも思えぬが朱拓風のデザインに、斬新さと風流が見られる。

注13 「硝子戸の中」の意匠は更紗模様集『花ふくさ』の中から取られて居る。」とある。『漱石文庫目録』(一三八七)に『花婦久佐』(更紗図譜) 山田直三郎 京都 山田芸艸堂 明治三六(二版) 和大二冊」と見える。

注14 改造版と岩波版初刷の石鼓文の表紙は同じであるが、『漱石の思ひ出』の題字は別字体。裏表紙の図案は改造版と岩波版は異り、岩波版は『漱石全集』と同じ。内容は岩波版では組み直している。改造版にあつた多くの写真は除かれている。本文は同じであるが、改造版の「あとがき」は、岩波版の「編集者の言葉」の中に引用されている。また新しく『漱石年譜』が加えられ今に至る。

補注

(1) 漱石の装幀及びその関連資料については次のような書がある。

。岩切信一郎『橋口五葉の装釘本』(沖積社 一九八〇・十二・二十一刊)

。佐渡谷重信『漱石と世紀末芸術』(美術公論社 一九八

二・二・二十二刊) 中第四章「漱石作品の装幀と挿絵」。

。神奈川文学振興会編『文学の挿絵と装幀展』(神奈川近代文学館 一九九七・十・四刊)

(2) 図9-16-2 遊字は稱字(同8-5)ではないかと読み取れる(『心』表紙原画図影から)